様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　７ 月　３ 日現在

機関番号：３４３１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００００７２

研究課題名（和文）仏教論理学の比較論理学・比較哲学的研究：学際的研究のための基盤構築

研究課題名（英文）Comparative and Philosophical Studies of Buddhist Logic

研究代表者
師　茂樹（Moro, Shigeki）

花園大学・文学部・教授

研究者番号：７０３５１２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：仏教論理学（因明）の研究者と、現代哲学、情報学等の研究者による研究集会を通じて、(1)論理学において必須の否定の問題、(2)論証を成立させるとともに記号と意味との対応付けの理論でもあるアポーハ（他の排除）論の問題、(3)日本の因明学において重視された四相違（四種類の矛盾）が因明の根本的な性質に関わる可能性、(4)四句分別（テトラレンマ）の論理学的、哲学的含意、(5)仏教論理学を現代の哲学的課題に対して応用する可能性などについての議論を深めることができた。加えて、哲学と仏教学が対話をしていた明治期の仏教論理学研究（村上専精、大西祝など）についての研究を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、グローバル化の進展に伴い、異文化間の対話が求められている。また、AI（人工知能）やロボットなどの進展とともに、認識や知識などについて根本的、批判的に検討する哲学に対する注目が高まっている（GoogleやAppleなどが哲学者を雇用しているのはその一例である）。AI等はグローバル企業によって開発、流通しているものであるため、これらの議論においても、非西洋的な視点の導入が求められている。本共同研究は、このような国際的、学際的な議論を可能とする基盤を基礎づけるためのものとなる。

研究成果の概要（英文）：Through comparative research meetings on Buddhist logic, philosophy, informatics, etc., we discussed (1) the problem of negation in logic; (2) the problem of apoha (exclusion of others), a theory of meanings as well as a theory of arguments; (3) the possibility that the four kinds of contradiction, which had been well-studied in Japanese tradition, could be related to the fundamental nature of Buddhist logic; (4) the logical and philosophical implications of the tetralemma; and (5) the possibility of applying Buddhist logic to contemporary philosophical issues. In addition, we were also able to advance our research on Buddhist logic studies during the Meiji period (e.g., Murakami Sensho and Onishi Hajime), when philosophy and Buddhist studies were in dialogue.

研究分野：仏教学

キーワード：仏教論理学・認識論　因明　比較哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 仏教論理学・認識論の重要性……仏教論理学・認識論は、アジアにおいて長い伝統と蓄積があり、哲学（史）の研究対象として重要であることは、広く認識されていた。
(2) 日本における比較論理学研究……幕末・明治維新期に東西論理学の比較研究が行われたが、20 世紀に入ると、サンスクリット写本やチベット語訳の発見・普及にともない、日本国内における仏教論理学･認識論の研究は文献学･思想史研究へとシフトし､やがてそれが主流となった。比較論理学研究も行われているが、他分野を含めた相互批判を通じて深められる機会は少なかった。
(3) 海外における仏教論理学・認識論の形式化・モデル化……欧米では、20 世紀を通じて緻密な文献学的研究が積み重ねられる一方、D. H. H. インゴルズ、J. F. スタール、B. K. マティラルらにより、インド論理学・仏教論理学の論証式を記号化し現代論理学の枠組みで表現しようとする試みが積み重ねられてきた。また、G. プリーストや出口康夫（研究分担者）による仏教を中心としたアジアの哲学との比較研究が進んでいる。こういった研究は、文献学・哲学の双方に新たな視点を提供するものではあるが、文献学中心の日本の仏教学界では大きな話題になることはなかった。

２．研究の目的

東西の哲学・思想を比較する比較思想研究は数多くあるが、論理学に焦点を絞った研究は少ない。奈良時代以来の伝統と、近代的文献学の蓄積を有する日本の仏教論理学･認識論の研究者と、形而上学的面だけでなく応用面でも多くの蓄積を持つ哲学・論理学・情報学といった分野の研究者が相互交流することで、双方に新たな視点を提供されることが期待される。

本研究では、仏教論理学・認識論に焦点をあて、以下の比較論理学・比較哲学的研究を行うことを通じて、仏教文献学者と論理学・哲学・情報学者、あるいは各地域の論理学的伝統の研究者間で分野横断的な相互交流が起きるような議論の基盤（インターフェース）の構築を目指す。

(1) 幕末･明治維新期以降に行われてきた比較論理学的研究をふりかえり、批判的に再検討する。特に、明治期の三大因明学者とされ、相互に交流のあった雲英晃耀・大西祝・村上専精の因明関連著作について、比較哲学的な視点から検討する。
(2) 仏教論理学･認識論について、これまで提案されてきた代表的な形式化･モデル化の試みを、仏教文献学・分析哲学・情報学などの多角的な視点から検討し、深化させる。特に、研究協力者の上田昇が提唱しているアポーハ代数などの諸概念について学際的な検討を行う。
(3) 仏教を中心とする、各地域の論理学的伝統において行われてきた様々な論証を、比較論理学･比較哲学的に検討する。特に、研究代表者・師が研究を行ってきた、唯識比量（唯識性の証明）や、定姓二乗・無姓有情の存在論証などについて検討する。
(4) 上記(1)～(3)のなかで用いられる「論証」「論理式」「推論」などの用語の内容を整理することで、異なる論理学（的伝統）間で比較研究をする際に必要な語彙の共通化をはかる。

これらの研究を通じて、人文学における国際的・学際的研究の促進が期待される。古代から近代に至る伝統と膨大な文献を有し、さらに近代以降の仏教文献学の蓄積がある日本が拠点となり、国内外の研究者の交流のハブとなることによって、仏教論理学・認識論を中心とした諸哲学研究の国際的な交流が盛んとなり、日本の仏教研究・哲学研究の国際的プレゼンスを高めることができる。

また､他分野との交流を通じて､仏教論理学･認識論を他分野で応用する可能性も期待できる。たとえば、従来初期的な段階にとどまっていた人工知能研究への応用や法推論システム等との共通性についての議論を発展させるなどが考えられる。

３．研究の方法

本研究では、仏教論理学・認識論の研究者と現代論理学や情報科学の研究者とが、現代論理学や情報科学で蓄積された道具立てを用い、共同で仏教論理学・認識論／因明学を解明するための研究基盤を構築することを目的とする。そのため、当初は国内外の研究者を招いたワークショップを開催する予定であったが、2020 年度以降は、新型コロナウイルス感染拡大のため、個別の文献研究やオンラインでの研究集会などが中心となった。

開催した研究集会は以下の通り。どちらも、研究目的の(2)のために開催したものである。
・科研費プロジェクト「仏教論理学の比較論理学・比較哲学的研究：学際的研究のための基盤構築」第１回研究集会（2020 年 1 月 12 日、於花園大学）。3 つの報告（護山真也「討論術としての仏教論理学―四相違をめぐる因明学の議論」、上田昇「アポーハ論の記号論理学的分析」、出口康夫“ Bhaviveka on Negation ”）の後、総合討論。
・「二辺を離れる：『今日のアニミズム』をめぐる鼎談」（2022 年 3 月 2 日、オンライン開催。以文社、上七軒文庫合同会社、科研費基盤(A)「種の人類学的転回：マルチスピーシーズ研究の可能性」との合同開催)。研究代表者の師が、哲学者の清水高志、仏教学者・亀山隆彦とともに、

インド論理学とアブダクションとの共通性などについて議論した。
　このほか、現代論理学の研究者が集まるオンライン集会で仏教論理学に関する報告を行ったり、現代の諸問題の解決にむけて仏教論理学がどのように応用可能であるかについての報告を行ったりするなど、積極的な研究交流を行った。
　また、文献研究などを通じて得られた成果は随時、学会発表や論文として公表された。

４．研究成果
　上記「研究の目的」であげた 4 項目について、それぞれ成果を述べる。

(1) 幕末・明治維新期以降の比較論理学的研究
　特に村上専精（1851-1929）の『活用講述因明学全書 第三版』に見られる西洋論理学との比較、論理学によって明らかになる真理等に関する議論について検討を行い、 ジョン・スチュアート・ミル（1806-1873）やハーバート・スペンサー（1820-1903）ら、ほぼ同時代の海外の哲学・論理学研究の影響について指摘する研究成果を出すことができた（師）。
(2) 仏教論理学・認識論の形式化・モデル化の試み
　アポーハ代数によるモデル化（上田）、矛盾許容論理によるモデル化（出口）、現代の人類学における議論を前提としたアブダクションとの比較（上記「二辺を離れる」）などに関する報告が行われ、活発な議論が展開されたが、十分な結論が出たとは言い難い。今後もより幅広い議論が必要であると考えられる。
　一方、東アジアの仏教論理学（因明）で重視される“理由（因）における四種類の矛盾（四種相違）”については、論理学としての因明の限界を示すものであり、論理学から討論術への軌道修正を示すものではないか、という重要な指摘がなされた（護山）。そうであるならば、比較論理学にとどまらない比較研究も必要となってくる。
(3) 様々な論証の比較論理学・比較哲学的検討
　定姓二乗・無姓有情の存在論証や、『大乗掌珍論』の空性論証、そしてそれをめぐる東アジアでおきた論争について歴史的な整理を行うとともに（師）、後者については現代論理学との比較研究が行われた（出口）。
(4) 語彙の共通化
　語彙の共通化については、検討を行うことができなかった。

　全体を総括すれば、当初想定していたよりも比較すべき対象が広範囲であることが明確になったことは、今後の研究の展開という意味でも一定の収穫であったと考えられる。反面、検討すべき課題が拡散し、モデル化や語彙の統一などについては明確な成果が出せなかった。
　以上の成果のほか、研究代表者（師）は、グローバル化の中で宗教間対立・文化間対立が起きている現状や、SNS が人々を分断している状況の中で、異思想・異哲学間での対話を前提に設計されている仏教論理学（因明）が現代において示唆を与えるのではないかという提言を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 師茂樹	４．巻 1
２．論文標題 玄奘が学んだ仏教知識論（因明）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 玄奘三蔵：新たなる玄奘像をもとめて（勉誠出版）	６．最初と最後の頁 226-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 師茂樹	４．巻 3
２．論文標題 唯識と言語 ： ポストモダン的な理解を超えて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 未来哲学	６．最初と最後の頁 45-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 師茂樹	４．巻 3
２．論文標題 比較哲学の現在 ： 護山真也『仏教哲学序説』をめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 未来哲学	６．最初と最後の頁 288-301
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 師茂樹	４．巻 44
２．論文標題 「死者」はどこにいるのか ： 仏教の死者観と人間中心主義	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代と親鸞	６．最初と最後の頁 214-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 師茂樹	4．巻 なし
2．論文標題 村上専精『活用講述因明学全書』の思想	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Klautau, Orion編『村上専精と日本近代仏教』法藏館	6．最初と最後の頁 57-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shinya Moriyama	4．巻 なし
2．論文標題 Kuiji's Analysis of the Four Kinds of Contradictory Reasons	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Shinya Moriyama (ed.), Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia	6．最初と最後の頁 261-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 師茂樹	4．巻 1
2．論文標題 AI・仏性・倫理	5．発行年 2020年
3．雑誌名 未来哲学	6．最初と最後の頁 169-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 師茂樹	4．巻 なし
2．論文標題 最澄『通六九証破比量文』の思想史的位置：二比量を中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 仏教思想の展開：花野充道博士古稀記念論文集	6．最初と最後の頁 177-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shigeki Moro	4．巻 なし
2．論文標題 Was there a dispute between Dharmapala and Bhaviveka?: East Asian discussion on the historicity of the proof of sunyata;	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Shinya Moriyama (ed.), Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia	6．最初と最後の頁 287-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 MORO Shigeki	4．巻 29
2．論文標題 Metalogic in East Asia: Discussion on the Antinomic Reason (*viruddh?vyabhic?rin) in P’an piryang non	5．発行年 2019年
3．雑誌名 International Journal of Buddhist Thought and Culture	6．最初と最後の頁 69～91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.16893/IJBTC.2019.06.29.2.69	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 護山真也	4．巻 68(1)
2．論文標題 作有縁性（satpratyayakartrtva）について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 印度學佛教學研究	6．最初と最後の頁 375-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 出口康夫	4．巻 Part 2, 2.4.3
2．論文標題 「われわれとしての自己」とウェルビーイング	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『わたしたちのウェルビーイングをつくりあげるために:その思想・実践・技術』，渡邉淳司,ドミニク・チェン監修	6．最初と最後の頁 240-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 師茂樹	4．巻 47(15)
2．論文標題 巨大数の経験	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 109-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 師茂樹	4．巻 109
2．論文標題 因明研究の現状と課題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 佛教學セミナー	6．最初と最後の頁 39-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　5件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 師茂樹
2．発表標題 唯識と言語：ポストモダン的な理解を超えて
3．学会等名 未来哲学研究所 第3回シンポジウム：言語を問う地平――語りえぬものへ（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 師茂樹
2．発表標題 衆生としての人間：仏教における人間中心主義批判的側面
3．学会等名 日本佛教学会2021年度学術大会（第90回大会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 清水高志，亀山隆彦，師茂樹
２．発表標題 二辺を離れる：『今日のアニミズム』をめぐる鼎談
３．学会等名 二辺を離れる：『今日のアニミズム』をめぐる鼎談
４．発表年 2021年

１．発表者名 師茂樹
２．発表標題 九州国立博物館藏写本・文軌『因明入正理論疏』巻一について
３．学会等名 日本印度学仏教学会 第71回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 師茂樹
２．発表標題 東アジアの仏教論理学（因明）について
３．学会等名 論理学友の会 第3回：論理の多義性、論理学の学際性
４．発表年 2020年

１．発表者名 護山真也
２．発表標題 作有縁性（satpratyayakartrtva）について
３．学会等名 日本印度学仏教学会第70会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 護山真也
２．発表標題 On satpratyayakartrtva
３．学会等名 復旦大学哲学学院宗教学系・因明講座(3)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 Self-as-We & Its Ethical Implications
３．学会等名 World Literature & Philosophies Lecture Series 7, Universit_ libre de Bruxelles/Vrije Universiteit Brussel.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 ＜われわれ＞としての自己：東アジア的全体論的自己の哲学的再生
３．学会等名 第193回 Philethセミナー，北海道大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 Self-as-We and Consciousness of Somatic Agency: A Reactivation of East Asian Buddhistic Thoughts
３．学会等名 Philosophy Department Seminar Talk, Chulalongkorn University.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 Entrustment of Agency and Self-as-We
３．学会等名 第六回日中哲学フォーラム（The 6th International Forum of Sino-Japanese Philosophy), Key Note Speech, 中山大学（広州）.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 Self-as-We and Its Implications
３．学会等名 Invited Talk to Philosophy Department, University at Buffalo, The State University of New York, Buffalo.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 Existential Crisis and Renewal of Self
３．学会等名 Key Note Speech, The Graduate Student Conference on Asian Philosophy, Whither Asian Philosophy?, National Chengchi University, Taipei.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口康夫
２．発表標題 Panchronic Self: The temporal mode of East Asian True Self
３．学会等名 An International Workshop in Kyoto, “Asian Analytic Philosophy and Contemporary Issues on Time”, Kyoto University.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 師茂樹
２．発表標題 森政弘の仏教思想とAI・ロボット開発
３．学会等名 日本宗教学会2019年度学術大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 師 茂樹	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 248
３．書名 最澄と徳一 仏教史上最大の対決	

１．著者名 Shinya Moriyama	４．発行年 2020年
２．出版社 Arbeitskreis fur tibetische und buddhistische Studien Universitat Wien	５．総ページ数 304
３．書名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	出口　康夫 (Deguchi Yasuo) (20314073)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	護山　真也 (Moriyama Shin'ya) (60467199)	信州大学・学術研究院人文科学系・教授 (13601)	
研究分担者	守岡　知彦 (Morioka Tomohiko) (40324701)	京都大学・人文科学研究所・助教 (14301)	
研究分担者	白須　裕之 (Shirasu Hiroyuki) (30828570)	京都大学・人文科学研究所・助教 (14301)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	上田　昇 (Ueda Noboru)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関